

論文

夏目漱石「満韓ところどころ」における 満洲クーリー¹の表象

郭 璇

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Images of Laborers in Natsume Soseki's *Everywhere of Manchu and Korea*

GUO Xuan

Abstract: The connection between Japan and Manchu can be traced back to Russo-Japanese War in 1904-1905. After the war Japan hold the lease of the Liaotung Peninsula and gained the rights to South Manchurian Railway. On the same time, with the development of the transportation industry of Japan, the overseas travel industry flourished, and the number of Japanese intellectuals to manchuria increased. The literary giant Natsume Soseki (1867-1916) is the representative writer who really set foot on the manchurian land and carefully observed and wrote about the manchurian people under this trend. In “*Everywhere of Manchu and Korea*”, a travel note he wrote after his trip to manchuria in the autumn of 1909, he carefully observed and described Chinese laborers (coolies). But he kept a psychological distance at all times, which was consistent with the schema of mind like *Imaginative Geographies* in Said's *Orientalism*.

Keywords: Coolie, Manchu Literature, Class consciousness, Imperialism, Imaginative Geographies

一、はじめに

満洲と日本との関係は、日清戦争後の遼東半島の割譲権の争議に始まり、日露戦争を経た後、日本は南満洲鉄道をはじめとした在満権益を手にしたことに遡る。同地の経営のために、国策会社である満鉄が設立されたのと同時期に、日本の近代交通も発展し、満洲へのツーリズムが勃興しはじめた。一九〇六年六月、『東京朝日新聞』は『大阪朝日新聞』と共に「満韓巡遊船」ツアーの企画を組んだ²。このような背景の下で、満洲の地に足を踏み入れる文学者も続々と出現した。この時流に乗った漱石は、本格的に満洲の風土に

接近した近代文化人の嚆矢に位置付けられる。

一方、同時代中国の各所に見られたクーリーは、中国人のシンボルと広くみなされていた為、日本の作家達にもよく取り上げられた。たとえば、与謝野晶子、遠藤周作、北川冬彦、水上勉などが、それぞれ作中でクーリー像を描き出している。漱石の「満韓ところどころ」は、まさにこうした視点でクーリーに着目した最初期の作品と言える。

この作品は一九〇九年の秋、漱石が、学生時代の旧友で当時満鉄総裁を務めていた中村是公の招きに応じ、大連、旅順、營口、奉天（現在の瀋陽）、撫順、長春、ハルビン、京城（現在のソウル）、釜山など満洲や朝鮮の各地を約一ヶ月半旅行し、その際の見聞をもとに創作した紀行文である。同年の十月から十二月の間に、断続的に五十一回にわたって東京と大阪の両『朝日新聞』に掲載された。漱石は、この旅で総裁の客として、中村などが決めたスケジュールに従い、漱石の学友である大連税関長立花政樹や旅順警視総長佐藤友熊、東北大学教授橋本左五郎らと交流して最高級の礼遇を受けた。作品の内容は、主に道中での旧友との交際や、満鉄発展の見学を中心に展開されている。

この作品の研究で焦点となってきたのは、作品の性格へのアプローチを軸とした、漱石のアジア観に対する考察と、その原因の探求である。呂元明は『満韓ところどころ』には一句も、日本軍国主義による中国東北への侵略を責める言葉が見られない…（中略）…漱石の目には、中国人は単に食物や衣類や住居や環境が不潔だけではなく、国民全部が汚く、同時に『支那人は実に狡猾』だった³として、その中国人観を鋭く批判している。朴裕河は明治の衛生意識と文明批判の角度から「『汚』れに対する漱石の視線は『満鉄』＝帝国主義の視線とまったく一致している」⁴とする。総じて言えば、漱石の帝国主義・植民地主義に基づく差別意識が散見されるため従来の作品評価は低い。

しかし、この作品において、具体的にクーリーそのものがどのように捉えられているのかという点についての分析は不足している。本稿では、近代日本文学における満洲クーリーの表象という観点から考察し、漱石のクーリーへの視線と態度に着目する。具体的には、語りでの「余」＝漱石の視線という仮説に基づき、「余」がどのようにクーリーを語るかを読み取り、「余」がどのような立場でクーリーを観察し、どのような態度で彼らに接するのかを

分析することになる。その上で、サイドの『オリエンタリズム』で定義されている「心象地理」の概念を活用して、漱石による他の中国人への表象と心理的距離感をクーリーに対するそれと比較することによって、クーリー像をより明確にする。

二、満洲のクーリーと『朝日新聞』の中国人に関する認識について

「クーリー」という言葉で示される労働者の業種は、地域によって異なっていた。すなわち、上海など都市部では、「クーリー」が従僕や車夫などを示していた⁵のに対して、満洲の「クーリー」とは重労働者のことであった。南満洲鉄道株式会社経済調査会が編集した『満洲の苦力』によると、満洲の場合、クーリーは出稼ぎが多く、主な業態としては（一）雑役苦力、（二）土木建築苦力、（三）採炭苦力、（四）採鉱苦力、（五）荷役苦力の五種があった⁶。また、中国の他の地域では、クーリーが個人によって雇用されていた一方で、満洲のクーリーたちを管理していたのは、主に「満鉄」、或は日本の株式会社であった。いわば、満洲のクーリーは、日本の支配下で搾取される最下層の人間という性質を帯びていたと考えられる。漱石の満洲の旅は、その性質上、社会の上層の人々との交際を目的としたものであったが、途中で出会った中国人はほとんどクーリーであった。すなわち彼は、埠頭の労働者をはじめとして、馬車や人力車の車夫、トロ⁷の御者、豆油工場の運搬に従事する者、梨園の番兵など様々なクーリーと出会ったのである。

前述のとおり、「満韓ところどころ」はクーリーに着目する点にその先駆性を持つとされる。実際のところ、同時代のメディアにおいて、クーリーについて言及されることは少なかった。当時の『朝日新聞』における、一般の中国人に関する記述は、「支那人ハ由来不潔癖の人種を以て目せらる或者ハ曰く『南京町を通過すれば異臭紛々鼻を撲つに堪へず』⁸、「支那人を稱するに、漢語を以てしてハ豚尾漢といひ、日本特有の語にてハチャンチャンといへり⁹といったものが大半であった。すなわち、「不潔」などの否定的イメージや、「チャンチャン」などの蔑称が繰り返し用いられ、定式化される傾向が見られたのである。

三、「余」とクーリーの表象

1. 「余」について

この作品の語り手には、一人称の表現「余」を使っている。この「余」について、田中寛は「内在する意志が将来の自己確認的な意味をも賦与されているとみるべき」¹⁰と指摘し、また「自者、他者の双方向的立場としての「余」で、いわば、余所者、余計者のな、かつ高踏的見地からの眺望である。自分であって自分ではない。また他人であって他人ではない。アンビバレンツな視線である」¹¹としている。この作品全体の論調からみると、確かに「余」の論調は、文明講談する講談者のそれであり、やや尊大さが感じられる。一方、クーリーを観察するとき、「余」は常に意識的に対象と距離を保っているように思われる。このとき、「余」の語りは「傍観者」的なものだといえよう。

2. クーリーの表象

(1) 第一印象—埠頭のクーリー

「余」が満洲の地に着いた時、始めに見たのが大連埠頭のクーリーであった。

船が飯田河岸の様な石垣へ横にびたりと着くんだから海とは思へない。河岸の上には人が澤山並んである。けれども其大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う澤山塊ると更に不體裁である。余は甲板の上に立つて、遠くから此群集を見下しながら、腹の中で、へえー、此奴は妙な所へ着いたねと思つた。…(中略)…船は鷹揚にかの汚らしいクーリー團の前に横付けになつて止まつた。止まるや否や、クーリー團は、怒つた蜂の巣の様に、急に鳴動し始めた。其鳴動の突然なのには、一寸膽力を奪はれたが、何しろ早晚地面の上へ下りるべき運命を持つた身體なんだから、仕舞には何うかして呉れるだらうと思つて、矢つ張り頬杖を突いて河岸の上の混戦を眺めてみた。(一六〇頁)

この描写はこの作品の名場面としてよく言及されるが、同時代に初めて満洲の地に着いた日本人の、クーリーに対する印象を代表しているともいえるであろう。前半の描写は河岸に近づけようとするとき甲板に立った「余」が眺めたクーリーの全体像であり、これらのクーリーの「汚らし」さ、また夥しい数を表現している。一方、後半は「余」の乗った船が河岸に泊まり、クーリーとの距離が近づいてからの描写であり、群集としてのクーリーの喧騒

を伝えている。ここでのクーリーの表象は、以下のように捉えることができる。即ち、遠近法を使い、シビアな観察でクーリーたちを一つの全体としてクローズアップしながら、視覚から聴覚への感覚の転換によって、その生き生きとした空間の臨場感を読者に感じさせているのである。

また、ここでは「汚らしい」、「見苦しい」、「不體裁」といった否定的な語句を次々と並べ、不潔さを強調している。更に、漱石の造語である「鳴動」や、「怒つた蜂の巣の様」あるいは「膽力を奪はれ」といった表現により、クーリーの騒がしさを大げさに表している。

このように、大連埠頭でのクーリーとの初対面において、「余」の嫌悪感は寸分も隠さずに表れている。だが、実際のクーリーがもつ背景は、こうした描写にとどまるものではなかった。大連港は当時、満洲の貨物港である同時に交通の要衝でもあり、満鉄の管轄下で、主に満洲の石炭、炭油、大豆、豆油などの輸出において重要な役割を果たしていた。ここで、毎日平均五千人程に達するクーリーらは、船舶積卸、貨車積卸、荷繰、改装、看貫等を担う荷役労働者であった¹²。また、満洲クーリーの仲間内では「鞍山（製鋼所）が80斤、撫順（炭礦）が100斤なら、埠頭の苦力は150斤に担がないと一人前ではない」¹³といわれていた上に、実際に「普通114斤の舁担力のない者は埠頭苦力として採用されない」¹⁴という状況であった。そのため、埠頭のクーリーは、厳しい選抜により採用された、優れた素質を持つ人々であったといえる。しかし、「余」はクーリーらの担ぐ大変な作業に注目しておらず、外観の不潔と騒がしさのみをとりあげている。恐らく、「余」はそれらの事情について知らなかったのであろう。

以上をふまえて、この描写に関して特に注目すべきであるのは、「余」の姿勢と態度である。河岸から遠く離れている時、「余」の視線は「遠くから」クーリーたちを「見下」すものである。また河岸に近付くと、その視線はクーリーの喧騒を「眺め」るものとなっているが、これは身を局外に置くという傍観者の立場を示しているといえる。更に、クーリーのいる場所を「妙な所」と表現するのも、「余」とクーリーたちが同じ場所にいなながらも、いわば別の次元に存在していることを明確にするためである。このように、クーリーに対する「余」の描写には、傍観者の角度から彼らを評価しているという図式が見られる。また、クーリーへの「見下し」は、客観的観察に基づくものではなく、前述のようなクーリーの実情に関する無知からくる、「余」の主観的

な印象によるものと言えよう。

(2) 車夫—心理的距離感への転換

大連埠頭の場面では、搬運クーリーの他、この旅で最も頻繁に接触した車夫との初対面も描写されている。

馬車が並んでゐた。力車も澤山ある。所が力車はみんな鳴動連が引くので、内地のに比べると甚だ景氣が好くない。馬車の大部分も亦鳴動連によつて、御せられてゐる様子である。従つて何れも鳴動流に汚いもの許であつた。(一六一頁)

ここでの描写からは、明らかに「余」が、前節で確認した、喧噪や汚しさといった搬運クーリーへの第一印象に影響されていることがわかる。しかし、「余」の車夫に対する観察は、これに止まらなかった。というのも、この旅では、都市内の移動は殆ど馬車と人力車であり、常に車夫と出くわす状況にあつたからである。そうしたなかで、「余」の車夫に対する観察は、より繊細なものとなっていく。

第四十五章の奉天の満鉄公所に関する話において、その内容の大半は馬車に乗った際の不快な体験によって占められている。

荷物と人間をぐるに乗せて、構内を離れるや否や、御者が凄じく鞭を鳴らした。峠を越す田舎の乗合馬車よりも手荒な取扱方である。廣い通りは夫程でもないが、次第に城内に近づくに従つて、今迄野原同然に茫々としてゐた往來が、左右の店の立込んで來ると共に狭くなる上に、鐵道馬車が其真中を駆けつゝあるにも拘らず、烈しい鞭の影は一分に一度位は屹度頭の上で閃めいた。馬は無理にも急がなければならない。けれども奉天丈あつて、往來の人は馬車の右にも左にも、前にも後にも、のべつに動いてゐる。其處へ騾馬を六頭も着けた荷車がくるのだから、牛を驅る様にのろく歩いたつて危ない。それなのに無人の境を行くが如くに飛ばして見せる。我々の様な平和を喜ぶ輩は此車に乗つてゐるのが既に苦痛である。御者は勿論チャンチャンで、油に埃の食ひ込んだ辮髪を振り立てながら、時々満洲の聲を出す。余は八の字を寄せて、馬の尻をすかしつゝ眺めた。さうして、みだりに鞭を脊せ骨に加へて、旅客の御機嫌を取るのは、女房を叱つて佳賓をもてなすの類だと思つた。(二五五—二五六頁)

このように車夫は、「油に埃の食ひ込んだ辮髪を振り立」て、「凄じく鞭を鳴ら」し、「烈しい鞭の影は一分に一度位は屹度頭の上で閃」くといった、

「余」にとっては「手荒な取扱方」をしている。また「みだりに鞭を脊せ骨に加へ」るのは、「旅客の御機嫌を取る」故意的な行為である。こうした無人の境に行くが如き御し方を、一気に描き出している。更に、その御し方により生じる速度と震動への恐怖という「余」の不快な乗車所感を織り交ぜ、満洲到着時の叙述と比べて、より近い距離でのクーリーとの場면을再現している。また、「チャンチャン」は当時日本人が辮髪の人に対しての蔑称として用いていたものであり、ここでは車夫に対する「余」の差別感情を一層際立たせている。

また、「けれども奉天丈あつて…（中略）…無人の境に行くが如くに飛ばして見せる」という表現は、車夫の乱暴な御し方が、往来の人に危害を加えるのではないかという「余」の憂慮を含むものでもあった。そのことは、続く事故現場の話から理解される。

現に北陵から歸りがけに、宿近く乗り付けると、左り側に人が黒山の様になたかつてある。其邊は支那の豆腐やら、肉饅頭やら、豆素麵杯を賣る汚ない店の隙間なく並んである所であつたが、黒い頭の塊まつた下を覗くと、六十許の爺さんが大地に腰を据ゑて、両脛を折つたなり前の方へ出してゐた。…（中略）…不思議な事に、黒くなつて集つた支那人はいづれも口も利かずに老人の創を眺めてゐる。動きもしないから至つて静かなものである。猶感じたのは、地面の上に手を後へ突いて、創口をみんなの前に曝してゐる老人の顔に、何等の表情もない事であつた。痛みも刻まれてゐない。苦しみも現れてゐない。と云つて、別に平然ともしてゐない。氣が付いたのは、たゞ其眼である。老人は曇よりと地面の上を見てゐた。

馬車に引かれたのださうですと案内が云つた。醫者はあゝないのかな、早く呼んでやつたら可いだらうにと間接ながら窘なめたら、えゝ今に何うかするでせうといふ答である。此時案内はもう本來の氣分を回復してゐたと見える。鞭の影は間もなく又閃めいた。埃だらけの御者は人にも車にも往來にも遠慮なく、滅法無頼に馬を追つた。帽も着物も黄色な粉を浴びて、宿の玄關へ下りた時は、漸く残酷な支那人と縁を切つた様な心持がして嬉しかつた。（二五六―二五七頁）

「余」が、北陵から奉天の帰り道で見かけた、馬車に轢き逃げされた老人が賑やかな通りに座っている場面である。この描写について以下で述べるような先行研究では漱石の被害者と民衆に対する冷眼視の面に集中して論議が展開され、特に類似の人力車事故の場면을描写した魯迅の「小さなでき事」を

引き合いに出して比較している。

「小さなでき事」のあらすじを述べると、以下のようなになる。語り手である「私」は人力車で出かけたが、車夫はボロボロの服を着た老婆を棍棒で引き倒した。この事故によって、「私」は途中で人力車を降りざるをえなくなった。「私」は、車夫に「構うな」と言ったが、車夫はやはり老婆を助け起こし進んで交番まで連れていった。そこで、「私」は車夫の「偉大さ」を発見し、それと同時に、自分の「小ささ」に反省したのである。

この二つの作品を比較して、呂元明は「魯迅は、このような民族の運命にかかわるような大事に身を投げ出し、漱石は、それらの『汚い国民』や『残酷な支那人』から離れることを幸いと喜んだのだ」¹⁵と指摘しているように、仲間に助けの手を差し伸べない無関心な中国人に注目し、これを「余」が「残酷な支那人と縁を切つた」心理と結びつけている。しかし、この二つの作品は、それぞれ自民族への視線と観光者としての視線という異なる視線から叙述されたものであるため、両者を比較することは疑問である。

そこで、事故現場の描写を振り返ると、そこでは被害者の老人に焦点が当てられており、その表情の観察は実に興味深い。即ち、「余」が注目したのは、老人の顔に「何等の表情もない事であつた。痛みも刻まれてゐない。苦しみも現れてゐない。と云つて、別に平然ともしてゐない。」その代わりに、老人は「曇りと地面の上を見てみた」というのである。この表現は、被害者であるはずの老人が孤立無援の状態にあることを示している。これは次回の話に出る、「生きた風呂敷包の如く車の上で浮沈」¹⁶するほどだったという、車夫の乱暴な御し方に耐える以外にない「余」の描写とよく呼応している。ここから、「余」の老人に対する視線は、この老人に対して、同じ被害者として共鳴したことを示すものであり、共有した体験による自己の投射と言えよう。そして、事故前の心配が現実になったことによって、この共振はさらに増幅されたのである。

その故、ここには、傍観する群衆と老人という中国人の人物像を描出しているが、「余」の抱く感情の矛先は、手を差し伸べない群衆というより、むしろ周囲の安全を顧みず、乱暴な運転で事故を起こした車夫に向けられていたと考えられる。

この場面の「余」の反応は、強い義侠心を持っている『坊っちゃん』の主人公を想起させる。「坊っちゃん」は勸善懲悪を旨とする、正義感の強いまっ

すぐな人間であり、この場面の「余」と共通点が見られる。というのも「余」は、被害者の老人への連帯感から彼に同情を示して、「醫者はみないのかな、早く呼んでやつたら可いだらう」と案内者に聞いているからである。また、加害者の車夫への義憤の気持ちは、事故を目撃した「余」が、車夫の御し方を「滅法無頼」と称し、馬車を下りた時に「漸く残酷な支那人と縁を切つた様な心持がして嬉しかった」と述べたところに表れていると考えられる。

次の回でも人力車車夫の御し方に対しての批判が続く。

人力は日本人の発明したものであるけれども、引子が支那人もしくは朝鮮人である間は決して油断しては不可ない。彼等はどうせ他の拵へたものだといふ料簡で、毫も人力に対して尊敬を拂はない引き方をする。…（中略）…其引き方の如何にも無技巧で、たゞ見境なく走らせへすれば車夫の能事畢ると心得てゐる點に至つては、全く朝鮮流である。余は車に揺られながら、乗客の神経に相應の注意を拂はない車夫は、如何に能く走けたつて、遂に成功しない車夫だと考へた。（二五八頁）

このように、異なる文明を「上」から見「下」して批判するという点で、前述の事例と同一である。

その他、トロ車夫、番兵の印象も好ましいものではない。

勢ひよく二三十間突いて置いて、ひよいと腰を掛ける。汗臭い淺黄色の股引が脊廣の裾に觸るので氣味が悪い事がある。すると、速力の鈍つた頃を見計らつて、又素足の儘飛び下りて、肩と手を一所にして、うんうん押す。押さなければ可いと思ふ位、車が早く廻るので、乗つてる人の臓器は少からず振盪する。（二二六一二二七頁）

番兵は汚ない顔を揃えて、後の小屋の中にごろごろしてゐた。馬賊の來襲に備へるために雇はれたればこそ番兵だが、其實は、日當三四十銭の苦力である。（二三五頁）

いずれの描写も、クーリーの「汚い」、「汗臭い」イメージと、それに対する「余」の嫌悪感を示している。

(3) 労働者への目線—大豆油工場のクーリー

以上にみた事例では、「余」のクーリーに対する評価は否定的で、嫌悪感すら抱いているといったものであった。しかし、「余」のクーリーへの観察はこれに留まらない。大豆油工場を見学した時に見た搬運クーリーについての描

写で、「余」のクーリーへの評価には変化が見られる。

クーリーが下から豆の袋を背負つて来て、加減の好い場所を見計らつて、袋の口から、ばらに打ち撒けて行くのである。其時はぼうと咽る様な烟が立つて、数へ切れぬ程の豆と豆の間に潜んである塵が一度に踊り上る。

クーリーは大人なしくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、たゞ見物するのでさへ心持が好い。彼等の脊中に擔いでゐる豆の袋は、米俵の様に軽いものではないさうである。夫を遥の下から、のその脊負つて来ては三階の上へ空けて行く。空けて行つたかと思ふと又空けに来る。何人掛りで順々に運んでくるのか知れないが、其歩調から態度から時間から、間隔から悉く一様である。通り路は長い厚板を坂に渡して、下から三階迄を、普請の足場の様に拵へてある。彼等は此坂の一つを登つて来て、其一つを又下りて行く。上るものと下りるものが左右の坂の途中で顔を見合せても殆ど口を利いた事がない。彼等は舌のない人間の様に黙々として、朝から晩迄、此重い豆の袋を擔ぎ續けに擔いで、三階へ上つては、又三階を下るのである。其沈黙と、其規則づくな運動と、其忍耐とその精力とは殆んど運命の影の如くに見える。實際立つて彼等を觀察してみると、しばらくするうちに妙に考へたくなる位である。(一九〇頁)

ここでは重い大豆袋を持って、建物内を移動するクーリーを描写している。また、その身振りを歩調、態度、作業の頻度、顔の表情まで觀察し、全体の動きから局部へと焦点化する、冷静で緻密な觀察がなされている。

豆袋の烟や自身の体の発する汗臭いの充滿した工場にいるこれらのクーリーたちは、埠頭のクーリーたちと比べても、決して清潔な状態ではなかつたはずである。しかし、この場面で「余」が注目しているのは、むしろ彼らの労働の態度である。

この場面については、竹内実は資本主義の黎明期にあたる当時の時局から考え、資本による労働者の搾取を訴えるものであり、「人間を労働の現場においてとらえることのできた漱石のリアリズムの到達が見られる」¹⁷と評価している。

竹内の主張に基づいて上の文章を検討するとき、更に注目に値するのが、「彼等は舌のない人間の様に…(中略)…其沈黙と、其規則づくな運動と、其忍耐とその精力とは殆んど運命の影の如くに見える」という表現である。ここで「余」がとりあげたのは、クーリーらの「舌のない人間の様」な「沈黙」、また画一的な動作のくり返しである。それらが、「余」の目には「運命の影の

如くに見え」というのである。人間の身体をを持っているにも関わらず、人間として話す権利、また自分の身体と自分の人生を自由にする権利が剥奪された被支配者としてのクーリーの境遇を暗示しているのではないかと思われる。

これに続いて「余」は、クーリーの「赤銅の様な肉の色」¹⁸が、煙の中で汗によって光って「勇ましく見え」¹⁹たという。また「この素裸なクーリーの體格を眺めたとき、余は不図漢楚軍団を思ひ出した。昔韓信に股を潜らした豪傑は吃度こんな連中に違ひない」²⁰という連想をしている。ここでクーリーらを、『三国志』の中の「豪傑」に類似させているのは、このように無言で必死に働き、人生が支配される恥に耐えるクーリー達が、一心にエネルギーを蓄え、将来必ず反抗しようとするであろうという、「余」の予測の暗示であろう。

また、油を入れるための桶が、「静に深さうに淀んである」²¹のを見て、「余」は恐ろしくなり、「この中に落ちて死ぬ事がありますか」²²とクーリーの命の安全性への心配を示している。満鉄発展見学のために油工場の繁栄と壮観さを見に行つたものの、この植民地の繁栄の背後にある危機と、それに対する漱石の不安感がここで示されている。そこには、先行研究に指摘された帝国主義的、植民地主義的な見方は確認できないのである。

更に、この章の結尾で「余」は「クーリーは實に美事に働きますね、且非常に静肅」、また「一日五六銭で食つてゐるんですからね。どうしてあゝ強いのだか全く分かりません」²³と感心している。ここで漱石は、自身には想像できないほど低廉の賃金で過酷かつ単調な労働の提供を、満鉄にによって強いられたクーリーたちの艱難辛苦を、再度暴き出しているのではないだろうか。

このように、この大豆油工場のクーリーの描写については、彼らが単に搾取される労働者としてだけでなく、満鉄の支配下に置かれている点を重視していることも瞩目されなければならない。

更に、この話の前の章には「化物屋敷」の話が出ている。この「化物屋敷」の由来は「日露戦争の當時の病院」²⁴であったが、「戦争が烈しくなつて、負傷者の数が増して来るに従つて、収容した人に充分の手当ができない許でなく、気の毒ながら見殺しにしなければならない兵士が澤山に出来て、其等の創口から出る怨みの聲が大連中に響き渡る程凄じ」²⁵だったので、「化物屋敷」と呼ばれるようになった。ところで、漱石の日記を確認すると、17章で描か

れた大豆油工場見学よりも、16章で述べられている「化物屋敷」への訪問のほう時間が的的には後であった事がわかる²⁶。そのため、この16章は、何らかの意図に基づいて挿入されたものであることが想定される。そこで両章の叙述を確認すると、「三階」という表現が共通して現れることが注目される。すなわち、16章では、「余は此屋敷の長い廊下を一階二階三階と幾返か往来した」とされており、「化物屋敷」に三階があることが明確に示されている。他方で、17章の冒頭では「三階へ上つて見ると豆許りである」²⁷とだけ述べられており、実際には場面が大豆油工場に移っているにもかかわらず、あたかも「余」がまだ「化物屋敷」の中に止まっているかのごとき印象を与えている。すなわち、17章が前章と繋がっているように感じられるのである。

こうした叙述の背後にある漱石は、戦争による負傷者の怨念が漂う「化物屋敷」の陰うつな様子から、大豆油工場の運搬クレーの姿を思い出し、文章のなかで両者を結びつけることを想起したのであろう。その際、本来の時間的順序を破り、「化物屋敷」の描写を先行させることで、続いて登場するクレーの労働環境に苦悶する「余」の姿を、いっそう効果的に提示することができるという判断がなされたと思われる。

四、クレー以外の中国人の表象との対比

この旅で漱石が接触した中国人の多くはクレーであった。そのため漱石は、彼らを緻密に観察することに注力したといえる。他方で、クレー以外の中国人とはほとんど出会っておらず、その描写も作品中では目立たない。しかし、漱石が彼らに対して、どのような距離のとりかたを見せるのか、またそれはクレーの場合と異なるのかという点で、注目すべき対象といえる。

熊岳城滞在中、「余」は同行の橋本左五郎に誘われ、梨園を見に行き、その主人である咸文に出会った。

主人が其中で一番旨い奴を——何と云つたか名は思ひ出せないが、下男に云ひ付けて、策に一杯取り出さして、みんなに御馳走した。主人は脊の高い大きな男で、支那人らしく落付拂つて立つてゐる。(二三四頁)

西槇偉の考察によると、

一八六七年に生まれた咸文は、漱石と同年で、当時四二歳。父親が武人であったが、詩文をよくし、文人の教養を持ち合わせていた。その長男は武人

となり、三男咸文は家業に携わりながら文人として遼寧南部ではわりと知られた人物となった。彼は書に優れ、その二人の息子も絵をよくした。²⁸

この様に、当地の名門であり、文人として知られていたこの梨園の主人について、案内の橋本は中国古典を愛読していた漱石に、前もって伝えていたと思われる。そのため、咸文との面会に際して、「余」の心内で古典に由来する堂々たる偉丈夫のイメージが喚起されたのであろう。梨園の主人が「支那人らしく落付拂つて立つてゐる」ように見えたのは、こうした「余」の連想を反映したものと言える。

続いて、熊岳城の温泉から上がり、「余」が川上を眺めている際に、牛追いに会う場面がある。

河がぐるりと緩く折れ曲つてゐる。其向ふ側に五六本の大きな柳が見える。奥には村があるらしい。牛と馬が五六頭水を涉つて來た。距離が遠いので小さく動いてゐるが、色丈は判然分る。皆茶褐色をして柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりも猶小さかつた。凡てが世間で云ふ南畫と稱するものに髣髴として面白かつた。中にも高い柳が細い葉を悉く枝に収めて、静まり返つてゐる所は、全く支那めいてゐた。遠くから望んでも日本の柳とは趣が違ふ様に思はれた。水は柳の茂る處で見えなくなつて居るが、猶其先を辿つて行くと、忽ち眼に打つかる様な大きな山脈がある。(二二九頁)

緩やかに蛇行した川や、向こう岸の柳、川を渡っている牛馬、そして牛追いが、空間を作り出しているのが見てとれる。この場面について、朴裕河はこう指摘している。

これは実際の中国に、既に南画などによってイメージしていた中国を重ね合わせているわけで、体験より観念が先立っていたことを表していて面白いのだが、それより注目したいのは、中国が既に慣れ親しんでいた〈風景〉としてその姿を表したとき、初めて安心感と好意でもって描かれるということである。そこにいる「牛追」は、一枚の「南画」として眺められ、その瞬間、現実の人間から〈文化〉の一部分となる。²⁹

つまり、牛追いが満洲の自然と一体となった風景は、漱石のもつ教養の範囲内にある南画のイメージと一致することで、〈文化〉とみなされているのである。また、「余」はこの風景を趣のあるものと感じ、牛追いに向かう「先を辿つて行く」態度を示している。

続いて、「若い女」と会う場面に移る。

濡ぬ手拭を下げて、砂の中をぼくぼく橋の傍迄歸つて來ると、崖の上から若い女が跣足で降りて來た。橋は一尺に足らぬ幅だからどつちかで待ち合せなければなるまいと思つたが、向ふはまだ土堤を下り切らないので、此方は躊躇せず橋板に足をかけた。下駄を二三度鳴らして、一間程來たとき、女も余と同じ平面に立つた。そこで留まると思ひの外、ひらひらと板の上を舞ふ様に進んで余に近づいた。余と女とは板と板の繼目の所で行き合つた。危ないよと注意すると、女は笑ひながら軽い御辭儀をして、余の肩を擦つて行き過ぎた。(二三〇頁)

ここでは崖の上から降り、軽やかな足取りで「余」に近づき、「余」と橋の間で行き交い、笑いながら軽い会釈をした「若い女」を描いている。ここでは「余」は自ら彼女に声をかけ、結果的にかなり接近しているのである。このように、「余」と「若い女」の近接した様子を描いている。またこの場面で、「若い女」は上から「降りて来」て、「余」と「同じ平面」に立ち、余の「肩を擦つて行き過ぎ」ている。そのため、この動きを追った「余」の視線は、クーリーの場合とは対照的に、まず下から彼女を仰ぎ見て、遠くの風景に留まり続けることなく、彼女の動きに合わせて徐々に自分の近くへと移動していつている。

また、この「跣足の少女」については、「既存の心象風景のなかに棲息していた想像の産物」³⁰で漱石の「東洋的な文人趣味が無意識のうちに捏造したイメージ」³¹との指摘がなされている。

以上のように、個別的、肯定的なかたちで描写される中国人も存在した。そして「余」は彼らに心理的に接近しようとする好意すら示しているのである。これらの人々と、個性のない群れとして登場するクーリーとの間には、歴然的とした差異があるといえよう。

紀行文とそこに描かれる他者表象の問題を考える際に、よく用いられるのが、サイードの『オリエンタリズム』における空間区分の議論である。サイードはこう述べている。

なじみ深い「自分たち」の空間と、その自分たちの空間の彼方にひろがるなじみのない「彼ら」の空間とを名付け区別する、というこの普遍的習慣は、実は地理的区分を行う一つのやり方なのであり、それはまったく恣意的なものであっても一向にかまわない。³²

空間区分には恣意性があり、地理的のみならず、観念的、あるいは心理的にも、自他を区分することになると述べている。これが「心象地理(imaginative geographies)」と呼ばれるものである。またサイドは、この区分を「自分の心のなかで勝手にこうした境界線を設け」³³ることであると表現している。

個々の中国人にたいする漱石の評価の差異の問題は、この「心象地理」の観点から検討することができよう。梨園の主人や牛追い、「若い女」が肯定的に評価されているのは、彼らが中国古典の表象、あるいは憧憬の対象として、漱石にとって価値あるものを有する存在と捉えられているからである。そのため彼らは、「境界線」のこちら側、「自分たちの空間」に属するものとなった。一方クーリーや老人は、彼が共有しうるものが見出されなかったために、「なじみのない「彼ら」の空間」に分類されたのである。

また、この「心象地理」には別の側面もある。『The dictionary of Human Geography: Forth edition』のこの語の項では、サイドの論説を引用しながら、「他所の——人々や景観、文化や『自然』の——表象であり、またこれらのイメージは、その作者の欲望、ファンタジー、先入見、ひいては作者とその対象との間に横たわる権力のグリッドを映し出す」³⁴と定義している。この点を考慮すると、主体である漱石と観られる他者としてのクーリーの間に、植民地支配を根拠とする不平等な権力関係がやはり存在していたことも否定できないであろう。

五、おわりに

以上、この紀行文の特徴であるクーリーの描写を中心に、「余」がどのようにクーリーを描き、その際に彼らをどのように捉えていたのか、について論じてきた。これに加え、他の中国人の描写と比較する中で、「余」の持つクーリー像を抽出する試みを行った。「余」のクーリーに対する観察は、外見への注目から始まり、労働の姿や身振り、表情などへ移行した。クーリーの印象は全体的に「汚らし」く、特に馬車や人力車などの車夫はいずれも乱暴で素行は悪いが、大豆油工場のクーリーは精勤に努めているなど、その評価は一様ではなかった。また、クーリーを描写する際、その叙述の後に「余」を登場させ、高踏的位置から彼ら进行评估したり、「余」の姿勢や態度を示した。これによって、漱石自身を表象する「余」と他者であるクーリーとの対比は歴

然とさせるかたちで、クーリー像を提示したのである。

「余」＝漱石の視線によってなされる、異国の他者であるクーリーの描写は、サイドのいう他者を空間的に区分する手法や、心象地理のメカニズムから解釈できる。こうした分析は、評価の主体としての漱石の限界を示すものともいえる。

とは言え、当時の日本国内は日清戦争、日露戦争の勝利を経て、全国的に軍国主義と帝国主義の様相が強くなるという状況にあった。また、この旅は旧友である中村の誘いで実現したものであり、作品を当時の『朝日新聞』に載せ、満鉄を宣伝するという意味も持っていた。この頃朝日新聞社に入社し、職業作家としての道を歩み始めていた漱石は、『朝日新聞』の言論傾向に従っていた部分もあったのであろう。

その上、従来にないクーリーの緻密な描写は、漱石の緻密な観察眼、および鋭敏な感性によるものと考えられるため、テキストの先駆性と独自性も指摘できる。こうした点から、直感的観察や個人的感情と結びついたこの紀行文は、明治期に社会的影響力を持った『朝日新聞』に掲載されたこととも相まって、明治期の大衆の満洲認識に影響を与えるものとなったと考えられる。

付記

本論文は、日本文藝学会第56回大会（2019年6月29日—7月1日、於熊本・九州ルーテル学院大学）において口頭発表した内容をもとにしたものである。

注

作品本文の引用は、『漱石全集 第八巻』「満韓ところどころ」（岩波書店、一九八四年）に拠った。傍線はすべて稿者による。

¹ 中国人労働者のことを指している。もともとタミル語で「雇う」を意味する語を英語で言い表した *cooly* (*coolie*) が、中国語の意味と発音に合わせて「苦力」とされた。なお、原文ではほぼ「クーリー」と表記されているので、本稿ではこれに統一する。参照：南満洲鉄道株式会社経済調査会編『満洲の苦力』（南満洲鉄道、一九三三年）二十一頁。

² 参照：有山輝雄『海外観光旅行の誕生』（吉川弘文館、二〇〇二年）十八頁。

³ 呂元明「夏目漱石『満韓ところどころ』私見」（日本社会文学会『近代日本と「偽満洲国』』不二出版、一九九七年）二七五—二七六頁。

- ⁴ 朴裕河『ナショナルアイデンティティとジェンダー：漱石・文学・近代』（クレイン出版、二〇〇七年）一〇七頁。
- ⁵ 参照：大阪市商工課編『支那貿易叢書 第二輯（上海に於ける労働者）』（大阪市商工課、一九二四年）三頁。
- ⁶ 参照：南満洲鉄道株式会社経済調査会編、前掲『満洲の苦力』二八頁。
- ⁷ トロッコ（truck の訛）の略。土木工事に用いられる運搬手押車で、軽便軌条上を走る四輪無蓋台車。参照：原武哲「夏目漱石「満韓ところどころ」新注解—旧満洲の今昔写真を添えて」（『絃説 II』第一〇号、二〇〇六年一月、三十頁）。
- ⁸ 『東京朝日新聞』朝刊 一八九九年七月二日 五頁。
- ⁹ 『東京朝日新聞』朝刊 一八九九年八月一〇日 二頁。
- ¹⁰ 田中寛「夏目漱石「満韓ところどころ」の憂鬱—言語表現にみる中国・朝鮮観を中心に」（『大東文化大学紀要 人文科学』第四七号、二〇〇九年、二十九頁）。
- ¹¹ 同上、二十九頁。
- ¹² 参照：南満洲鉄道株式会社総務部資料課編『満鉄要覧』（南満洲鉄道、一九三二年）一一二—一一五頁。
- ¹³ 『満洲グラフ』復刻版 第四巻第五号（原誌一九三六年五月号）（ゆまに書房、二〇〇八年）八十七頁。
- ¹⁴ 同上、八十七頁。
- ¹⁵ 呂元明「夏目漱石「満韓ところどころ」私見」（日本社会文学会編『近代日本と「偽満洲国」』不二出版、一九九七年、二七七頁）。
- ¹⁶ 夏目漱石「満韓ところどころ」『漱石全集 第八巻』（岩波書店、一九八四年）二五九頁。
- ¹⁷ 竹内実『日本人にとっての中国像』（春秋社、一九六六年）三一〇—三一三頁。
- ¹⁸ 夏目漱石、前掲『漱石全集 第八巻』一九〇頁。
- ¹⁹ 同上、一九一頁。
- ²⁰ 同上、一九一頁。
- ²¹ 同上、一九一頁。
- ²² 同上、一九一頁。
- ²³ 同上、一九一頁。
- ²⁴ 同上、一八八頁。
- ²⁵ 同上、一八八頁。
- ²⁶ 日記によると、九月七（火）日に「大連 中央試験所 豆油。精製 cooking purpose. olive oil ノ九部ノ一」、九日（木）に「バケモノ屋敷。荒涼たり。夫より以上の寄宿舎。」とある。そのため、時間的には豆油工場の見学が先行するはずである。参照：『漱石全集 第十三巻』（岩波書店、一九六六年）四四四—四四六頁。
- ²⁷ 夏目漱石、前掲『漱石全集 第八巻』一八九頁。

- ²⁸ 西槇偉「黍遠し河原の風呂へ渡る人—熊岳城温泉と黄旗山の梨園」（西槇偉・坂元昌樹編『夏目漱石の見た中国—『満韓ところどころ』を読む』集広舎、二〇一九年、一一—一二頁）。
- ²⁹ 朴裕河「漱石『満韓ところどころ』論—文明と異質性」（『国文学研究』第一〇四巻、一九九一年六月、五十八頁）。
- ³⁰ 李哲権「体液の変質としての文体—孤独な言語としての文体—漱石の『満韓ところどころ』を読む」（西槇偉・坂元昌樹編、前掲『夏目漱石の見た中国—『満韓ところどころ』を読む』二五三頁）。
- ³¹ 同上、二五三頁。
- ³² エドワード・W・サイド（今沢紀子訳）『オリエンタリズム 上』（平凡社、一九八六年）一二九—一三〇頁。
- ³³ 同上、一三〇頁。
- ³⁴ 参照：R.J.Johnston・Derek Gregory・Geraldine Pratt・Michael Watts『The Dictionary of Human Geography』（Oxford:Blackwell、二〇〇〇年）三七二頁（筆者訳）。